

< JICA 関西訪問 >

JICA 青年海外協力隊員として、中米・エルサルバドル で防災・災害対策に活躍した女性の体験談などを聞く



上の階は海外からの
研修員が宿泊できる
ようになっている

IIN では 5 月 10 日、会員 8 人が JICA 関西(神戸市中央区)=写真左=を訪れ、JICA の使命やビジョンについて学ぶとともに、青年海外協力隊員として中米の国、エルサルバドルで 2 年間、防災・災害活動を行った山口まどかさんから、現地での体験談を聞かせていただきました。以下はその概略です。

JICA 関西とは

まず、JICA についての説明が JICA 開発教育支援事業担当の山本さんからありました。

世界には 196 の国があり、約 80 億人がそれぞれ、様々な課題を抱えて生きている。また、開発途上国についての説明の中で「IIN の皆さんが今朝、茨木市からここ(ジャイカ関西)へ来られるまでに、途上国とどんなかかわりがありましたか」と問いかけました。

IIN のメンバーからはコーヒーやフルーツなどの食料品や、衣類、エネルギーの分野など、輸入されているものとの様々なかかわりについての意見が出ました。それに対し、山本さんは「普段の衣食住の中で、私たちは意識しなければ気付かないほど当たり前に、多くの国々とかかわっています。自分たちの生活を考えることにもつながるからこそ、世界中の国に興味を持つことは大切だと思います」と語りました。

そして、今、日本は先進国に分類され、他国への援助・支援を続けているが、食糧難だった戦後は学校給食でユニセフなどから食料援助を受け、その他の分野においても(黒部ダム、高速道路の建設、鉄道建設など)いろいろな国際機関から技術面、資金面において様々な支援を受けたことを説明。さらに、大震災の際には途上国を含め、世界中から多大な支援を受けました。「お互い様なのです」と国際協力活動の意味を語り、最後に、「信頼で世界をつなぐ」が JICA のビジョンであると説明しました。

また、JICA について、正式には独立行政法人国際協力機構のこと(JICA 関西は独立行政法人国際協力機構関西センターで、JICA の国内拠点のひとつ)。ODA(政府開発援助)の実施機関で、ODA の中でも二国間援助、「技術教育」や「有償・無償の

資金協力」などを行っていること。さらに、JICA が派遣している JICA 海外協力隊は派遣先の開発途上国に住み、現地の慣習などを尊重しながら、そこでの経済、社会などの向上に取り組んでいる。 ※JICA は世界有数の二国間援助機関であると言われている。

山口さんの体験談



続いて、防災・災害対策ボランティアとして働いた山口さん＝写真左＝のハナシ。

山口さんは神戸市生まれ。中学生だった 1995 年、阪神淡路大震災の被害にあった。大阪大学人間科学部を卒業し、大手、繊維会社に入社したが、配属された人事、労務の仕事にあきたらず、「もっと、人の役に立っているという実感のある仕事がしたい」と退職。西宮市の消防局に入って消防士として 8 年間活躍した。

しかし、さらに「広い世界で働いてみたい。海外の防災についても知りたい」と考えていたところ、JICA 関西が「防災」の海外協力隊員を募集していることを知り、「私の思いにかなっている」と応募した。派遣国はエルサルバドルだった。

エルサルバドル

スペインから独立した国で面積は日本の四国より少し広い。人口は約 650 万人。言語はスペイン語。カトリック信者が多い。環太平洋火山帯にあり、地震が少なくない。ハリケーン、大雨、洪水、土砂崩れなどもあり、自然災害では日本と似ているところが多い。かなり昔は内戦もあったが、国民性は陽気で明るいイメージという。



山口さんも山火事では棒などでたたいて消した。

山口さんが派遣されたのはそんな国の首都でもなく、辺鄙な田舎でもないサンビセンテという地方都市。市役所の危機管理課で防災と啓発活動に携わった。

出発前、スペイン語を 3 か月ほど猛勉強したものの、最初は言葉が通じない、気候、食べ物が違う、断水がしばしばなど環境が違い過ぎる。そのため、毎週のように高熱、腹痛などに襲われた。半年くらい仕事にならず、「これじゃあかんなあ。申し訳ない」と悩んだ。そこで、気持ちを切り替えた。「とにかく、仕事を一時忘れ、現地を知る、相手を知る、自

分を知ってもらう。カタコトでもとにかく話す、共に行動する」ことに努力した。仕事では、どこへ何をしに行くのかわからない時も「私も現場へ連れてって！」と、真っ先にトラックの荷台に乗り込むことにした。半年ほどついて回って事情も言葉もわかり始め、職場の仲間が「おい、行くぞ！」と声をかけてくれるようになった。高熱、腹痛もなくなった。

危機管理課の仕事は災害現場対応と防災についての企画・立案や啓発活動。

しかし、災害対応や考え方が日本とは根本的に違っていった。

この町での仕事はまず、ゴミの処理、倒木や家畜の死体、家財道具も含めた大きな廃棄物が多く、蚊の退治、洪水、火事、台風、事故処理などもあった。

大きな樹が倒れかけてチェーンソーで切ると、蟻が雨のように降ってくる。刺されると痛い。牛や鶏の死体や、壊れた冷蔵庫などが山や川に廃棄され、保健所の職員と一緒に片付ける。不衛生からくる蚊の大量発生は感染症などで住民の命を奪いかねない。山火事が起きてても長いホースが無く、住民も駆けつけて棒などでたたいて消す。危機管理課だけでなく軍隊、警察、保健所などが出動し、協力して仕事をすることもある。



倒れた大木の処理も少なくなかった

危機管理課の職員は常勤の人もいるが、半分ボランティアのような人もいます。

日本では交通事故や火事があると、110番や119番に電話する、プロが駆け付けるというのが当たり前だが、この町では、近くを通りかかったドライバーがけが人を病院に運ぶ、火事が起きたらまず、自分たちで消火

しようと努める。山口さんによると「住民

は共助の精神が強く、たくましかった」。

学校での震災メモリアル行事を企画して、子供たちに啓発活動を行った。その他、日本の文化紹介として一緒に浴衣姿でお祭りを楽しみ、親善活動も行った。

山口さんは多くのことを語った後、最後に、「まずは相手を知り、自分を知ってもらうこと。これを大切にしている」と語りました。



講演を聞いて IN の参加者の皆さん=写真下=は感心し、以下のような感想を語っていました。

「苦勞をむしろ、楽しんでいるよ
うな山口さんの適応力に驚きまし
た」

「公助は不十分だが、人々が互
いに助け合う共助の精神がすばら
しいと思いました。働き甲斐とは、
住みやすさとは、幸せとは？など
を考えさせられました」

「山口さんの生き方に脱帽！私なら 2、3 日でギ
ブアップして日本へ逃げ帰ったでしょう」。



参加した IIN のみなさん

T. Hashimoto 記